

今日の中国教育社会における文化大革命の影響

—教育意識に関する世代別インタビュー調査をもとに—

杜 禹威

1966年～1976年にかけて、社会主義中国では、史上に前例のない全国規模の「プロレタリア文化大革命」が10年にわたり起こった。文化大革命によって、さまざまな社会制度（政治、経済、教育など）は、大きな変化を迫られ、極度の混乱が生じた。この社会状況のもとで、男女老若または、地位、階層を問わず、全地域の全住民がこの運動に巻き込まれ、公的場面においても、私的場面においても、物の考え方、行動様式、職業生活、家族生活および個人生活、価値観と信仰体系等々、何らかの影響をうけたことは間違いない。

そこで本稿では、文化大革命（1966年～1976年）に遭遇した世代の多くは、自身の文革での辛い経験が、子どもの教育達成をめぐって親の教育歴と社会階層との関連性を実証的データにもとづいて検討することを目的としている。そして、事例の分析に基づいて、文化大革命が「親世代」の人間形成や個人生活および家族生活にどのように影響を及ぼしたのかについて、インタビュー対象者の親たちにそれぞれの人生に与えた影響を分析し、「親世代」にとって彼らの成長に影響を与えた文革の体験、生活環境及び価値観などの差異によって、彼らがこどもの教育にはそれぞれ期待を抱いたものの、実際には子どもの教育に対する働きかけや、教育投資が異なっていることがわかった。その結果が、子ども世代の現在の地位達成状況につながっている。

キーワード：文化大革命，教育達成，地位達成

1. 本論の課題

本稿は、「文化大革命」という歴史的、社会的出来事がいかにその後の中国社会、とりわけ、中国における社会階層の形成に影響を及ぼしているのかを考察しようとしている。そのために本稿は、親の「文化大革命」経験の、子どもへの教育期待とその後の子どもの地位達成に対する影響を分析する。

1.1 「文化大革命」後の教育熱

現在の中国における教育達成には、教育状況の時代的変動が反映されていると考えられる。「文化大革命」期の特殊な教育状況は、「文化人」そして「中国文化」自体に対する空前の大災難であった。イデオロギーに基づいて「読書無用」、「ABCを学ばない」などということが鼓吹され、数千年前から読書人たちが尊敬してきた「孔子父子」は徹底的に批判され、良好な教育を受けて中国文化を継承していた読書人たちの地位も剥奪された（劉 2004）。しかし、「文化大革命」以降、人々の教育熱が消えることはなかった。一度は国家権力によって全面的に否定された「教育」が、多くの人々が高等教育機会を追い求める現在の中国社会の現状につながっている。

マスコミなどによると、現在の中国社会では、子どもが将来、どのような学歴を獲得するかは多くの親にとって最大の関心事であるようだ。大学、それもできるだけランクの高い「重点大学」へ入るためには、まず良い中学校、良い小学校へ入学することが先決となり、子どもたちはそれぞれの重点校をめざして早くからのぎを削ることになる。そして、一人っ子時代にあつて、高学歴が人生で成功するための重要なパスポートとなれば、親が子どもの教育にかかる情熱はいやがうえにも高まることになる。

とくに都市部では、たいいていの親たちは子どものためになることならば、どんな投資でも惜しまないのである。「幼い頃から良い教育を与えないと、将来の競争に生き残れなくなる」「周りの人たちも子どもの教育にお金を惜しまない。私たちの将来は、すべてこの子にかかっているのだから」といった考え方が、都市部を中心に広がっているのである。

1.2 「文化大革命」の影響

1966年から1976年にかけて、中国では、史上に前例のない全国規模の「プロレタリア文化大革命」が起こった。10年間にわたる「文化大革命」によって、さまざまな社会制度（政治、経済、教育など）は、大きな変化を迫られ、また極度の混乱が生じた。従来の社会規範と価値観、道徳観念は、厳しい批判と否定を浴びることになった。また、生産経済は停滞し、社会秩序は混乱し、無政府状態となった。この革命運動は、広範な大衆動員の形をとっていたために、中国全国の都市と農村の隅々まで、深く広い影響を与えた。この社会状況のもとで、老若男女、地位、階層を問わず、全地域の全住民がこの運動に巻き込まれ、公的場面においても、私的場面においても、物の考え方、行動様式、職業生活、家族生活および個人生活、価値観、信仰体系などに、何らかの影響をうけたことは間違いないだろう。

そして、「文化大革命」（1966年～1976年）に遭遇した世代（1948年～1957年生まれ）の多くは、家族が政治的迫害を受けたことや、毛沢東の知識青年政策などが原因で、教育を受ける機会を事実上剥奪された。そのため本稿では、こうした巨大な社会運動から教育意識がどのような影響を受けているのかを検討したいと考えている。

本稿が親の「文化大革命」経験の子どもの教育への影響を検討する第二点目の理由は、「文化大革命」後の中国において、学歴重視という傾向が現れてきており、この中で親の子どもへの教育投資がブームになってきたことにある。こうした親たちはほとんど「文化大革命」時代を経てきたものであり、自身は勉強しようと思ってもろくに勉強できなかった。そのために、かつて持っていた夢もすべて泡となった。その代わり、彼らの子どもへの期待は大きい。自分が実現できなかった夢を子どもに託し、子どもを通して実現しようと思っているのである。したがって、「文化大革命」による親の人生の変化が、親の教育意識にどのような影響を与えているのか、明らかにする必要がある。

以上述べてきたように、「文化大革命」という社会運動は中国の教育システムにとって重大な問題であろう。本稿の課題はこの「文化大革命」を背景として、子どもへの教育期待と子どもの地位達成と、「文化大革命」を経験した親の学歴とその後の社会的地位との関連を、実証的データにもとづいて検討

することである。

2. 親の「文化大革命」経験

2.1 「文化大革命」発生の原因

「文化大革命」は、プロレタリア革命路線とブルジョア反動路線・修正主義路線との対立という「二つの路線」論によっても説明されるが、「文化大革命」が生じた主な原因は、直接的に言えば毛沢東個人のカリスマ的存在及び毛個人崇拜であろう。毛沢東思想を奉じる紅衛兵たちは当時の中国共産党組織や政府組織を「走資派¹⁾」であるとして破壊し、幹部やインテリなどをことごとく批判、放逐、処刑した。

「文化大革命」開始の当時、政治の指導的立場・権力の座にあった人たちは、時代の流れの中で、その革命的精神が鈍化し、伝統的身分制・官僚主義・ブルジョアの風潮がプロレタリア党内部に浸透しているにもかかわらず、それを放置しているとされた。そして、社会一般もこのような状況を反映して、ブルジョア的思想への傾斜、社会主義のイメージとは異なる生活態度が横行しているとされた。青少年の間には、労働軽視・知育偏重の習慣がうまれ、とくに都会の子どもたちには、小学校から大学まで全ての学校段階において、有名校への入学イコール良い就職という考え方、つまりは有名校からエリート・コースを歩み立身出世することをよしとする風潮が広がっているとされた。

そのような状況下で、「文化大革命」は1966年5月に始まり、1976年10月の「四人組²⁾」粉砕までの10年と5ヶ月の間続いた。それは共産党の最高指導者である毛沢東が自ら決起し、その指導のもとに多くの大衆が参加するという、長期にわたる特殊な大衆運動であった。

2.2 「文化大革命」期の教育破壊（1966年～1976年）

1966年から1976年までの10年間に、中国の教育制度は全面的に破壊された。学校の幹部は「反動分子」「反革命修正主義者」、教職員は「反動的學術権威者」「修正主義の子」として貶められる存在となり「批判、闘争、家財没収、上山下郷³⁾、労働改造」などの被害をうけた。学生は「紅衛兵⁴⁾」を組織

し、全国で「大串連⁵⁾」を広げた(小島・鄭 2001)。1968年以後になると、全国的な暴動と混乱、労働者階級の反乱と権力奪取を経て、全国の各省レベルで軍・党幹部、大衆代表の三者連合による革命委員会方式の権力機構が相次いで樹立され、大衆間の暴力行為、混乱、社会の無政府状態はしだいに収束する段階に入った。

「文化大革命」期には、「革命教育」と「学制短縮」といった、独特の教育政策が採用された。そこに教育の理念はなく、「政治的な争いに支配」された政策であった(大塚 1989)。教育界においてそれまで権威をもっていた学長や教師、とくに学術専門家や教授たちが厳しく抑圧され、多くの教師が批判闘争にさらされ、農村に「下放」された。特に、1966年から1969年までの4年間、全ての教育機関が学生を募集することを中止した。1971年から、教育機関は試験的に労働者・農民・兵士を募集し始めたものの、その授業内容は依然として階級闘争に関するものばかりであった。経済の「社会主義的改造」が完了した後にも階級矛盾は依然として存在しており、政治、法制、学問、芸術などの面で絶えず革命を行わなければならないとする「継続革命論」にもとづく「文化大革命」において、教育分野の革命はその中心的役割を担っていた。

「文化大革命」を行うために大学入試が停止され、学校が休校になると、彼らは「経験交流」と称して街に出て、彼らに認められていた交通機関の全国無料利用権を利用して各地を旅した。大学入試批判や学校当局への反乱に端を発した運動は、過激化の一途をたどり、やがて無軌道な批判やセクト間の内部抗争などにより、数え切れないほど多くの死傷者が出たことも、今日では周知の事実になっている。

10年間の「文化大革命」で、中国の教育は大きな痛手を受けた。学校は1年ないし5年も授業を停止した。大学の学生募集は5年間、大学院の募集は12年間、留学生派遣は6年間停止された。大学は45校が廃止され、43校が合併され、17校が中等専門学校に改められた。既存の中等専門学校の大多数は廃校、閉校となり、多くの教師が批判闘争にさらされ、農村に「下放」された。教育は混乱に陥り、授業は短縮され、試験は廃止された。闘争の実践と現場教育が教室での学習の代わりとされ、学習レベルは問題にならないも

のとなった。大まかな統計によれば、10年間で大学院生は10万人、大学生と高等専門学校¹の学生は200万人減少したため、その後の人材不足を招き、経済成長に重大な悪影響を与える結果となった（小島・鄭 2001）。

「文化大革命」が人々にもたらした教育面での被害は、計り知れないほどのものであった。この時期、教育は革命を行わなければならないとの方針の下、政治教育が中心となっていた。これらの運動の特徴は、政治中心、とりわけ毛沢東思想中心の教育を徹底することである。教育革命の中で、教育内容が毛沢東思想に集約され、社会主義教育としても単純化されすぎたという問題があり、失敗した社会教育とも言われている（溝口 1978）。

2.3 「文化大革命」後の教育の発展（1976年～1997年）

「文化大革命」終結後、各レベルの学校は急速に秩序を取り戻した。例えば、全国大学統一入試制度、成績によって合否を決める制度、中等専門学校以上の卒業生に対する国の統一就職分配制度などが復活した。また、大学院生教育制度が復活し、優秀な学部卒業生が募集され、修士・博士課程を専攻した。さらに、《高等教育六十条》《中等教育五十条》が發布され、教師勤務評定制²が復活し、教師のレベル向上が急がれた。廃止された学校が再開され、各種各レベルの教育発展が促進された。

1976年、中国の政治は、「文化大革命」から「四つの現代化³」へと大きく変化した。いわゆる「脱文革」である。人々は、人間的な欲望の充足を求めるようになり、学習したい、進学したいという教育への熱望は非常に強いものとなっていた。精神革命から物質的豊かさの追求への大転換である。多くの知識人たちはその名誉を回復され、重苦しい圧迫から解放され、教育は正常な状態を取り戻した。そして「四人組」の教育に対する犯罪行為の摘発運動が展開され、社会主義体制における教育のあるべき地位と役割が明確にされた。

このように、10年間の「文化大革命」で、中国の教育は大きく変化した。そして、親の「文化大革命」時の辛い経験は、彼らの子どもにも伝わり、表面には現れなくても、子どもの学校観・教育観・階層観に深いところで影響し、子どもの教育達成への親の期待に反映されていることが予想される。そ

ここで、以下では、親世代における「文化大革命」での経験が、子どもの教育期待と地位達成と、親の学歴およびその後の社会的地位との関連に、どのように影響しているのか、データにもとづき実証的に分析してみたい。

3. インタビューの分析

3.1 インタビュー調査の対象、方法と内容

本稿で扱う調査データは、中国の東北部である都市に居住する人たちを対象にしている。調査の時期は、2007年7月～8月だった。調査の内容は、親の「文化大革命」での経験、親子関係、親の家族構成、親の社会的属性（父母の職業、学歴、家庭の経済状況）、子どもの教育意識、学歴達成、地位達成などである。

それでは、実際に対象者のインタビューデータを見てみよう。

表 3-1 [世代間移動の解析表—インタビュー調査データ]

ケース	親				子			教育期待 高/低	学歴達成 成功/不成功	地位達成 高/低
	性別	年齢	学歴	職業	性別	年齢	学歴			
A	男性	1943	大卒	医者	女性	1978	高学歴	高	成功	高
B	男性	1946	中卒	炭鉱工	男性	1975	高校中退	高	不成功	低
C	男性	1951	中2 中断 (再教育)	公務員	男性	1979	高学歴	高	成功	高
D	女性	1956	小5 中断 (再教育)	自営業者	男性	1982	高学歴	高	成功	高
E	男性	1931	大卒	校長(文革前)	女性	1957	小4 中断	低	不成功	低
				工場工(文革後)	男性	1970	中卒	低	不成功	低

インタビュー調査の最後に、筆者は親たちに「文化大革命での経験はあなたの子供の教育期待に対する態度や考え方に主にどのような影響を与えたと思われるか」と質問した。

A ケース～E ケースの親はそれぞれ、以下のように答えた。

A の親は「文化大革命を経験してきたからこそ、子どもに対する教育期待は非常に高いものがあり、勉強の重要性と勉強ができるというのはどんなに幸せなことであるかを子供に分かってもらい、社会の発展に伴う競争で負け

ないような実力を身につけてほしい」という強い思いがあるとしている。

A の子ども（次女）は「親の経歴によって小さい頃から家庭教育の環境がよく、勉強を重視する雰囲気の中で成長し、自分の努力もあって、（私は）一流大学を卒業して高所得層になった。」と言った。

B の親は「文化大革命で学業を中断させられ、青年期に勉学する機会を失い、学校教育を終了しないまま農村に入らされて、人生は大きく変化させられた。文化大革命後、（私は）仕事に必要な知識・技術・学歴がすべて低く、低い社会階層となった。そして、子どもへの教育期待については、かなりの期待を持っていたが、私たち自身が十分な教育を受けられず、子どもに文化資本を伝達する上で非常に不利な立場にある」と言った。

B の子ども（次男）は「子どもの頃に頭が良く、（親には）大学へ進学させるという希望があった。しかし中学校3年生くらいからあまり勉強しなくなり、高校に入ったものの喧嘩を繰り返して、高校は中退した。父親はかなりのショックを受けた」と述べる。親は彼に高い学歴を達成させようと、さまざま働きかけたが、結局かなわなかった。子どもは今、労働者として働いているが、本人も後悔はしているようだ。

C の親は、「文化大革命で中学の学業を中断し、高校の教育を受けずに社会に入ったことが、仕事などに影響を与えていると感じていた。教育の重要性を肌で感じ、子どもの教育に関して、投資を惜しまず、自分たちが苦勞しても子どもには良い教育環境を作ってあげたい気持ちが強かった」と言う。

C の子ども（息子）は、「勉強は絶対必要で、昔のようにひらめきやアイデアで金持ちになる人のケースもあるが、しかし総合的に見ると、やはりこれからは教育を受けず、知識がなければ負け組になってしまう」と自信満々に話した。

D の親は今日の社会において、高い学歴と専門的知識を持っていないと不利な立場になると考え、自分の息子に高い教育期待をもっており、彼に良い教育を受けさせるため全力を尽くし、留学させた。

一人っ子である息子は「高校の時は反抗心が強く、両親の気持ちを理解できず、また両親の仕事の忙しさのためにコミュニケーションの時間も少なかったため、「両親は仕事を自分のことより大事だと思っている」と勘違いして、

わざと目立つことをしていた」と言う。「次第に不良の学生たちと付き合いようになっていき、勉強したくないという気持ちが強くなっていった。その結果、高校は卒業したものの大学には進学できなかったため、両親は（息子が）外国に行って環境を変え立ち直ることを期待して、カナダ留学の手続きをしてくれた。カナダに留学した後に両親の気持ちを理解し、勉強に励んで、良い成績で大学を卒業することができた。今では、両親が自分のためにしてくれたことに感謝している」と彼は語る。

E の親は、教育に携わってきた教師として、もちろん自分の子どもにも良い勉強環境を作り上げて、大学に行かせたいと思っていたが、6人の子どもは誰も大学にいけなかった。それは、自分が（「文化大革命」で）批判・闘争の被害を受けた影響で、（子どもの）勉強に対する考え方が変わり、勉強を拒んだからではないか、と彼は考えている。

子ども（長女）が子どもの頃、父親は勤勉な学者で、いつも勉強している父親の姿が彼女の目には映っていた。彼女が小学校4年生の時に、「文化大革命」が起こった。彼女の父は学校で、多くの先生と同じように批判を受けた。まだ10歳だった彼女はその頃、不安な日々をすごしていた。よく「お前たちは、出身成分が悪いから、将来大学に入ってはいけない」と聞かされた。1976年に「文革大革命」が終結した後も、彼女には勉強への興味がなく、父親が働いている工場で働いた。

もう1人の子ども（次男）は「父が「文化大革命」で攻撃対象となり、紅衛兵運動の中で野蛮な自宅搜索を幾度もうけ、本を燃やされ、侮辱と暴行を受けたことが、幼い私の心に忘れえない記憶としてかすかに残っている。（私は）学校で喧嘩などを繰り返し、高校に進学せず、工場で働くことになった」と言う。彼ら2人の子どもには「文化大革命」の迫害を受け継がれてしまい、勉強に対して否定的な考え方をするようになり、それによって現在の社会的地位の低さがもたらされてしまっているのである。

4. 結び

「文化大革命」という社会変動に、親世代の人生は大きな影響を受けていた。彼らは学業の中断を経験し、青年期において勉学の機会を失い、学校教

育を終了しないまま農村や工場や軍隊などの社会生活の場に入らせられた。また、そうした状況が10年間も続く中で、「文化大革命」がそれぞれの親の人生に与えた影響は、大きく異なっていることが明らかになった。

インタビューの内容より、親の期待については、Eケースを除いて、A～Dケースは全部期待している。このことから、親の「文化大革命」による迫害の程度は、子どもの教育達成を大きく左右することが分かった。A～Dケースは、親の経験は迫害的でなく、子どもへの教育期待は高い。それに対して、Eケースでは、親は迫害されており、低い階層になり、家族における教育の重要性が相対的に弱くなった。子どもに対する教育期待は低い。そして、教育期待が高いA～Dケースの中には、親世代の教育程度が高い者もいれば低い者もいるが、それによって子どもの教育達成・地位達成が異なっている。A・C・Dケースが教育達成、そして現在の社会的地位も高いと見られる。Bケースは親も子どもも低学歴である。

また、中国社会が学歴社会化していることが調査対象者に認識されている。A～Dケースにおいては、親自身の社会的地位・人生経験に関連して、学歴社会の中で、親は子どもに高等教育を受けさせることを望んでいると考えられる。

今回の調査結果は、表3-1に示すように、親の学歴・階層が高いほど、子どもは教育達成・地位達成に向けてきびしくしつけられていることを明らかにしている。A・C・DケースとBケースの結果を比較すると、「文化大革命」で親が学業を中断して勉学の機会を失い、親の人生が大きな影響を受けたという共通点があるが、「文化大革命」が終了する時期には親の学歴の差や地位達成の差が拡大する傾向があるように思われる。そして、親の学歴や階層が高いほど、子どもにも高い学歴・地位の達成を期待する傾向が強まる。

このように、地位達成において、親の階層による差が生じている。これはパーソナリティの形成に社会階層の影響があることを示唆している。全体的な特徴を述べれば、高い階層の親ほど教育の多くの側面で厳しい教育を行っており、子どもに対する期待が高いことがうかがわれる。高い出身階層の子どもほど、親の大きな期待に圧迫されやすい。今回の調査結果の中でも、親の地位が高いほど、その子どもは期待の重圧を強く感じていることが示され

た。

家庭生活においても親の学歴は、以上のように、親の成長に影響を与えた「文化大革命」の体験、親の生活環境および価値観などの差異を通して、彼らが子どもの教育にそれぞれ期待を抱いたとしても、実際に行われた子どもの教育に対する働きかけや、教育投資を異ならせることが分かった。その結果が、子ども世代の現在の地位達成状況につながっている。

今回の事例は広大な中国のうち一部地域の調査に留まっている。今後はより広い地域範囲で調査を行い、事実を提示することにより、実証的研究のための努力を続けていきたいと思う。

[注]

1. 「走資派」とは毛沢東への異論、その政敵に対しての規定だったとされていることである。文革期、中国共産党内の高い地位にあつて資本主義の復活をめざす人間ということだが、劉少奇と鄧小平らを指していた。
2. 四人組は江青、張春橋、姚文元、王洪文。
3. 「上山下郷」とは、文化大革命期において、毛沢東の指導によって行われた青少年の地方での下放を進める運動のこと。
4. 紅衛兵は、文化大革命時期に台頭した全国的な青年学生運動。学生が主体であるが、広義には工場労働者を含めた造反派と同じ意味で使われることもある。
5. 大串連とは連帯活動。
6. 「四つの現代化」とは工業現代化、農業現代化、国防現代化、科学技術現代化である。
7. 政治教育は紅衛兵運動や毛沢東思想宣伝隊などの活動であつた。
8. 助学金は全額、一等（80%減免）、二等（50%減免）、三等（20%減免）の四種であつた。
9. 「工、農、兵」とは工場、農村、軍隊。

参考文献

- 劉精明, 2004「教育与社会分層」『中国社会分層』社会科学文献出版社.
- 小島麗逸・鄭新培, 2001『中国教育の發展と矛盾』御茶の水書房 P48.
- 大塚豊, 1989『旧い教育の克服と新しい教育の創出』東信堂 P82.
- 溝口貞彦, 1978『中国の教育』日中出版.
- 葛慧芬, 1999『文化大革命を生きた紅衛兵世代: その人生, 人間形成と社会變動との関係を探る』東京明石書店
- 大塚豊, 1989『旧い教育の克服と新しい教育の創出』東信堂. P82.
- 溝口貞彦, 1978『中国の教育』日中出版
- 中嶋嶺雄, 1966『中国文化大革命』弘文堂
- 矢吹晋, 1989『文化大革命』講談社
- 溝口貞彦, 1978『中国の教育』日中出版社
- 王年一, 1989『大動乱的年代』河南人民出版社
- 李春玲, 2003「社会政治変遷と教育機会不平等—家庭北京及制度因素对教育影響(1990-2001)」『中国社会科学』第3期
- 許欣欣, 2000『当代中国社会結構變遷と流動』社会科学文献出版社
- 張翼, 2004「当代中国社会流動機制的分析」陸学芸等編.『当代中国社会流動』社会科学文献出版社
- 叶存洪, 1990「社会階層と教育」『江西教育学院学報』第3期 P9-15
- 王金国, 2004「試論現段階我国的教育公平問題」『太原師範学院学報(社会科学版)』第6期 P127-131
- 張玉堂, 2004「高教大衆時代的教育機会均等問題」『河西学院学報』第1期
- 孟東方等, 1996「学生家庭社会經濟地位与高等学校類型及專業選択の相關性研究(上・下)」『渝州大学学报』第3期 P64-94

(と うい・首都大学東京大学院博士後期課程)

Social impact of the Cultural Revolution in China education

Interview Survey on awareness generation education

DU Yuwei

Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University

Chinese history has witnessed the unprecedented national wide movement, “the Great Proletarian Cultural revolution”, which last from 1966 to 1976. During that decade, Chinese society was in an extreme turmoil and various social system (political, economic, education) underwent tremendous changes. Previous social norms, values and moral concepts, were subject to severe criticism and negation. In addition, the stagnation of economic production, the disorder of social order and the government long-term paralysis and abnormal state, made it almost impossible for people to live a normal life. At any rate, those who were involved in the 10-year Cultural Revolution have been seriously affected in terms of their thoughts, behaviors, working, living, values and beliefs. In the Cultural Revolution a large number of people were framed and prosecuted, including some state leaders, some members of the democratic parties and celebrities from all walks of life. As a result, they have become the social vulnerable groups ever since the reform and opening up, an era that lays great emphases on knowledge. So the generation who underwent the Cultural Revolution attaches more importance to the education of their offspring. This paper aims to study the relevance between the parental education and social stratification and children’s education and social status by referring to concrete examples. It also discusses the impacts the Cultural Revolution has had upon those parents, whose life experiences directly affected the growth of their children in education and social stratification.